漂民宇三郎

漂民宇三郎

井伏鱒二

講談社

昭和三十一年四月三十日　第一刷發行　©

漂民宇三郎

定價・三三〇圓

著者　井伏鱒二

發行者　野間省一

印刷所　豊國印刷株式會社

發行所　株式會社　大日本雄辯會講談社

東京都文京區音羽町三ノ十九

振替　東京　三九三〇

電話　大塚(94)三一〇一(代表)

落丁本・亂丁本はおとりかへいたします。

(毛利製本)

漂民宇三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

天保のころ、越後の早田村に、金六といふ船乘の舍弟に宇三郎といふ若者がゐた。やはりこの者も船乘だが、兄貴の金六は氣性が激しいのに舍弟の方は氣が弱かつた。金はしつかり者、宇三は愚圖だといはれてゐた。

天保九年、金六、宇三郎の兄弟は、六百五十石積の「長者丸」といふ富山船の乘組に雇はれて、松前を出帆、江戸に回航の途中、寄航した唐丹（たうに）浦沖で西風に遭つて吹き流された。漂流すること六箇月、天保十年四月二十四日の朝（洋式で云へば千八百二十九年六月五日）アメリカの捕鯨船に救はれて、サノイツ諸島（ハワイ群島）のうち、ウワヘ島のヘイドといふ港に着いた。はじめの乘組十一人のうち、漂流中に食糧と水の缺乏で落命したもの二人、己の責任を感じて投身自殺したもの一人、島に着いてから病死したもの一人。ただし、投身自殺したのは金六であつた。

生き殘りの者は、島の民家で下男働きなどしながら命をつないでゐた。そのころアメリカから日本へ遠征に出るペルリの軍艦が島に寄航するといふ噂があつた。漂民たちはその軍艦に便乘させられることになつてゐたが、日本遠征が延期されたのでロシア領カムサッカ行きの便船に乘せられて、カムサッカ、オホツカ、スエツカを經て、ロシア船でエトロップのフルベツに送られ（宇三郎だけは船に居殘つて）天保十四年九月上旬、松前城下へ着いた。

この漂民たちのことは古賀茶溪手錄の「蕃談」や、著者不詳「漂民聞書」などに詳しく書いてある。ことに「時規物語」といふ尨大な手書本全十二卷には、肉筆極彩色の挿繪入りで本文は詳細を極め、附錄篇として、アメリカ語、ハワイ語、ロシア語の字引まで附けてある。

以上の書物は、漂民から聞書きしたものと思はれるが、いづれも宇三郎に關するかぎり一言も觸れないで、その名前さへも長者丸乘組のうちから除外されてゐる。しかるに素老生手錄本「異國物語」といふ書物には、宇三郎を中心に長者丸漂流の始終を書いてある。この手書本は明治十二年の脫稿で、筆者素老生は主に宇三郎に興味を寄せてゐる。

ロシア船に居殘つた宇三郎は、カナダ西海岸沖の一島パラノフのシトカ港に移り、そこで半年あまり荷揚人足になつてゐた。當時、この島はロシア領に屬し、シトカの港はロシア毛皮會社總支配人パラノフの個人經營になつてゐた。島の名もパラノフと名づけられてゐる。毛皮獲得のためロシア人の東方進出を企ててゐた最先端の港であり、毛皮取引のため各國の交易船が出入りしてゐた港である。

宇三郎は、シトカ寄航のフランス船に便乘してパナマに行き、一箇年ほど土工をして（そのころ運河はまだ開通してゐなかつた。）次にアメリカ船に便乘して大陸東部のリッチモンドに行き、その町で旅の廣東人の從僕になつてサノイツのウワヘ島のヘイドに行つた。これは宇三郎が捕鯨船に助けられて初めて上陸した港である。戸數百軒あまりの新出來の町で、近くに淺間山のやうな山容の、火を吹いてゐる山があつた。

宇三郎はこの港町の時計屋に懇望されて混血娘の入婿になつた。この女の父親は出稼の廣東人で、母親は土着のカナカ人である。宇三郎の時計修繕技術が一人前になつたころ、アメリカ大陸に同志討ちの南北戰爭がはじまつた。アメリカ人にとつては國の一大事だが、他國人にとつては不時の相場をねらふ絶好な機會である。どさくさで一と稼ぎするつもりから、わざわざ人夫志願でウワヘ島からアメリカ大陸へ渡つて行く者もゐた。宇三郎も志願した。しかし南軍北軍の區別はない。要するに勝ちさうな方の軍夫を志願するつもりで、書置を殘して家を拔けだした。リッチモンドには、かつて七箇月ちかく在住して町の樣子も大體は心得てゐる。リッチモンドに行つてみるつもりであつた。ところが最早や渡航は流行おくれの氣味で、港に駈けつけてフランス船に乘船を申込むと一言のもとに斷わられた。アメリカでは、南軍の港を北軍が閉鎖してゐるので外國船の入港が難しい。いつ出航するかわからないといふことであつた。

宇三郎は止むなく時計屋に引返した。混血の嫁は涙をながして喜んだが、廣東人の父親は苦りきつた顏で何やら廣東語で短く喋つたきり默りこんでゐた。あとでその意味を嫁にたづねると、

時計の長針が短針を追越したと思つても、あとから追ひかけて行くのと同じことだと云つたさうである。宇三郎は廣東の禪問答かもわからないと思つた。父親の廣東人は小指の爪を伸び放題に任せてゐて、それが越中早田村の一向宗の坊さんの爪とそつくりである。つい尊敬の念が湧いて來るのであつた。

混血の嫁は、廣東風に愛蓮（オイレン）といふ名前である。混血だが全く廣東人としか見えないので、近所の人たちはオイレンのこともカントンマンと云つてゐた。

素老生の「異國物語」は、晩年の宇三郎の談話を基礎にして綴られたものである。長者丸乘組達の名前にも當字が多く、「蕃談」「漂流聞書」「時規物語」を參照すると、場所や年月にも誤記が可成り見受けられる。宇三郎は自分の若いときの冒險談も、妻のオイレンにも繰返して語りきかせたことだらう。兩人は嘉永三年から同棲したが（足かけ十二年目の、文久六年に南北戰爭がはじまつて）南北和合してから足かけ四年目の明治元年にオイレンが病歿した。宇三郎の方は長壽を保つたので、「異國物語」の筆者素老生が明治十五年にハワイに行つたときには健在であつた。そのころ宇三郎の倅は、やはりカントンマンの祖父以來の時計商を營んでゐた。

宇三郎と兄貴の金六は、親子ほども年齡に差があつた。松前の港を長者丸で出帆のとき、金六は四十九歳、宇三郎は十八歳であつた。宇三郎のお袋には初めのうち子寶がなかつたので、お袋の弟の金六を養子に迎へ、それから十數年後に宇三郎が生れた。二人は兄弟とは云つても叔父甥

である。

金六は船乘として相當の經驗を持つてゐた。松前通ひの仲間からも、早田村の金六は東廻(ひがしまはり)の船（南部から江戸の間を乘る船）の巧者であると云はれてゐた。

舍弟の宇三郎は、海がきらひな弱蟲だから船乘には向かなかつた。商人にでもなればいいのだが、そのきつかけもなく、金六の指圖を受けながら船の炊(かしぎ)を勤めてゐた。しかし悪い癖で、船のなかでも仕事の手が空くと草雙紙などを出して讀む。これが金六の氣に入らない。大きな聲で呶鳴られる。船乘にとつては、草雙紙を讀むことは大變な學問である。金六の云ふところによると、船方(ふなかた)なる者は學問すると天候を見定める勘が鈍つて來る。天候は、人間の顏に感じられる大氣の移り變り一つで見定められる。船乘が生齧りに學問などしてゐると、人間の生れながらの勘が凋んで役に立たなくなるといふのであつた。

ちやうど金六と宇三郎が、生れ在所の早田村に歸つてゐるときであつた。長者丸の船頭平四郎が、金六に賴みごとを云つて訪ねて來た。すなはち、いままで長者丸の表方であつた船方が、東廻の渡海は氣がすすまなくなつたと云ひだしたので、急に表方がゐなくなつて困つてゐる。ついては、東廻の渡海に巧者な金六に、表方の役を引受けてもらへたら幸ひだと云ふ。給金も悪くない。一緒に舍弟の宇三郎も乘組んで結構だと云ふ。金六は卽座に引受けた。

長者丸の積荷は、四斗俵の糧米三十俵と、松前で積んだ昆布六百石。乘組は、金六と宇三郎を加へて十一人。

船頭	越中富山木町浦吉岡屋	平四郎	(五十歳)
親司	越中射水郡長徳寺村	八左衛門	(四十七歳)
表方	越後岩船郡早田村	金六	(四十九歳)
岡使	越中東岩瀬田鍛冶屋	太三郎	(三十七歳)
片表	越中四方(よかた)	善右衛門	(四十歳)
追廻	越中放生津古新町	六兵衛	(三十一歳)
同	越中放生津新町	七左衛門	(二十三歳)
同	越中東岩瀬田	次郎吉	(二十六歳)
炊	越中四方	五三郎	(二十五歳)
同	越中放生津新町	金藏	(十八歳)
同	越後早田村金六弟	宇三郎	(十八歳)

船頭の平四郎は元來が富山の賣藥商人で、船方のことについては疎かつた。したがつて、表方の金六が頼りである。船の表方は船頭の次の位置にある者で、舵を取り、陸地の見えない大海を帆走るときも、この者の判斷次第に船を進めて行く。天候を見て、港に逃げ込むのも港から出て行くのも、この者の裁量ひとつに任せてある。責任も重い。

長者丸が松前を出帆したのは、天保九年十月十日であつた。それも縁起の悪い船出であつた。松前の港を出かけるときには、すれちがひの船に突きあてられて傳馬船をつぶされた。その修理

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をするために田ノ濱に寄ると、一向宗の坊さんがお經を讀みにやつて來て緣起でもない白骨の御文章を讀んだ。たいてい長途の渡海に出る船は、どの船でも土地の巫女や坊さんを呼んで祈念をしてもらふ習慣である。長者丸では巫女も呼んで拜んでもらつた。年のころ三十五、六の、勿體ぶつた風をする女だが、神棚の前で祈禱をあげて歸るとき、本船は來月の二十三日ごろ危難に遭ふと神のお告げがあつたと云つた。長者丸の乘組はみんな一向宗の者だから、せつかく拜んでもらつたのに、「そんなことあるもんか。巫女(かぐなぎ)の、だらぶち。」と嘲笑つて取りあはなかつた。

巫女の來た翌日、惡魔拂ひに伺つたと云つて、獅子舞のやうなことをする者が來た。こんものは、今までに、つひぞ見たことがない。後で思ふと、坊さんも巫女も獅子舞も不吉な影を積みに來た手合のやうに思はれた。

田ノ濱では、傳馬船の修覆が出來るまで、十四、五日間ほど船宿に泊つてゐた。船頭の平四郎は、事のついでにこの港で商取引をした。ここでは米の相場が騰つてゐる最中で、江戸よりも高値をよんでゐると云はれてゐた。平四郎は岡使の太三郎に云ひつけて、船の糧米三十俵のうち二十俵を鹽鮪(しび)百本あまりと賣り替へた。田ノ濱を出て仙臺領の唐丹浦に碇泊中、米の値がいいので平四郎は十俵のうち八俵を賣つてしまつた。舟方どもは面と向かつて平四郎に楯つくことが出來ないので、岡使の太三郎に追廻の次郎吉が、

「あかんのう、太三。あと二俵しか殘つとらん。大將の慾の股が、突張つて裂けさうぢや。」と云ふと、

「いや大將の儲は、みんなの儲と思へ。餘計な口をきくな。」と太三郎が窘めた。

十月二十三日の朝、長者丸は唐丹浦を出帆した。この港は、袋のやうに入口が狹くて四里ほど深く入りこんでゐる。よく晴れた朝で、港を出るまでは風いでゐたが、外海に出ると俄に大風が吹きだした。このときの狀況を、「時規物語」に次のやうに書いてある。藩公の命令で、役人が漂民に問ひただして書きとめたものである。

「——湊を離れ候ところ、四ツ時頃（今の十時）より大西風になり申し候。南部にて、あかんぼ風と唱へ候て、海水の色、赤く見え候。（中略）同日晝夜、鹽鮪、昆布、百石目ばかり打捨て、二十四日にも昆布二百石目ほど打捨て申し候。二十五日夜明、見候へば、奥州金華山の大きさ、桅をふせたるほどに見え候ゆゑ、沖合二十里餘りも吹流されたりと覺え候ところ、それも晝後は見えず候。もはや地方へつくことはなるまじく、船をたすけ申すべしと帆柱を切り、表隔（おもてべだて）と申し候て船の舳の方に、碇二挺おろしおき候。これは風の吹くままに流れ申さぬために、かく致し候。（中略）二十七日に、船を打越し候高波これあり候。二十三日夜より二十七日夜までは、霙雪降り寒風堪へがたく、そのうへ五日の間、たまたま粥樣のものをすすりたる事これあり候へども、その餘、食事も調へがたきにつき甚だ難儀いたし候。——これは飯を炊き候へば、船ゆり候て、鍋より水こぼれ候ゆゑ、追々水を入れ候て後には粥の樣になり申し候。——かくては地方（ちかた）へ着き難く、辰巳（東南）の方に唐（から）の國あるよし承り候、とてもの事にそれに着きたしと道先（表方）金六申し候へども、船に帆柱さへなく候へば如何いたすべきや、またその國も有る無し知れ

がたき事とて、いづれも嘆き候。（後略）」

この同じ場面について、素老生の「異國物語」には次のやうに書いてある。外地に居殘つた老年の漂民の遠慮ない追想談を書きとめたもので、日本の役人や昔の船乘仲間に氣がねしてゐるやうなところは見つからない。

「――船頭平四郎は慾張にて、不當な相場をねらひ唐丹湊を立つに先だち粮米二俵のみ殘して賣り盡す。しかるに湊を出づれば忽ち大風吹出で大時化となり、てなざる（帆につけた繩）切れて詮すべもなし。あれよあれよと云ふ間もなく吹き流される。すなはち、神に祈りて帆柱を切るに、なほ船の走ること、一時間に十二、三里と覺ゆ。船は右に傾き左に傾き、一同、ごろりごろりと右に左にころげまはる。このとき大波一枚、船を打越して水船となり、積荷の昆布は水びたしなり。船內せましと滿載せし六百石の昆布なれば、水にひたりて脹らまば、船は眞二つに裂けるべし。みなみな仰天して手をとりて泣き叫ぶに、八左衞門は年巧なれば心得て、水嵩を計りて叫びて曰く、『みなみな聞けよ、思ひのほか水は淺いぞ。淦（あか）は深さ五尺に足らぬ。みなみな、力を合せて淦を汲めよ、淦を汲めよ。』と。依つて一同、無我夢中にて淦を汲み、水に濡れたる昆布をば百五十石ばかりも海中に投ずるに、しらじらと夜は明けそめぬ。曉の薄ら明りに打見れば、一同の指の爪、ことごとく剝げ落ちて流血淋漓たり。片表の善右衞門、年嵩なれども狂ひ泣きに泣きて曰く、『俺はここから先、もう行かんぞい。おおい大將、おおい舵取、船を停めてくれ、船を停めてくれ。』と。善右衞門、また叫びて曰く、『あの折、荒天に船を出せと云うたは、

船頭ぢや。あの大將づらする平四郎ぢや。やあ平四郎、地方も見えぬに、大海に木の葉の如く漂うて、米一俵あるばかりとは何事ぢや。米を賣つたは、勘定だかい平四郎ぢや。』と。されども船頭平四郎は默して答へず、合掌して天を拜す。（中略）やがて善右衞門、おそるおそる平四郎の傍に這ひ寄りて、さきの己が暴言を詫びて泣き伏しぬ。（後略）」

この「異國物語」によると、善右衞門はこのときから氣の狂れた狀態になつて、あらぬことを口走るやうになつた。しかし船頭平四郎の慾張であつたといふ非難は別として、用心が足りなかつたといふ非難には甘んじなければならぬ。船方といふものは、木樵と同じやうに一升飯を喰ふではないか。

一同、漂流五日目まで休みなしに働いたが、いかにも疲れが出たので運を天に任せて睡眠をとつた。翌日、二十九日の朝になると、西風が出て霙混りになつたので、船が流れないやうに碇をおろした。碇綱に繩を付けたすと、このあたりの海の深さは二百尋以上であることが知れた。

十二月一日から東風に變つたので、櫂や竿を寄集めて帆柱にした。すると忽ち西風に變り、また東風に變つた。東風と西風が交りばんこに吹きつけるのである。お鬮を伺つてみると、陸地は酉戌（西北西）の方角で三百里と出た。みんなそれを半ば信じたが、唐の國へ三百里か、どこの陸地へ三百里か、一同おそるおそるそれを話のたねにした。

十七日の夜からまた大時化で、一枚の高波が襲ひかかつて水船になつた。たつた一枚の波でも大した力である。てんま組（船の眞中の荷物を入れておく場所）と、高の間（舳の方の苫葺の場

所）を同時に打毀された。もうこの上は神佛を拜むよりほかはない。一同、喧嘩口論を止すことにして、聲をそろへて「南無阿彌陀佛……」を唱へながら淦を汲み出した。すると、また高波が襲ひかかつた。そこで南無阿彌陀佛を止して「六根清淨……」を唱へながら淦汲みをした。それでもまた高波が襲ひかかつて、今まで持ちこたへて來た傳馬船が流れ失せた。

「おのおの、覺悟をきめよう。」

年嵩の八左衞門が云ふと、みんな、云ひ後れるのを怖れるやうに、「覺悟をきめよう。」と口々に云つた。

覺悟とは、これ以上の苦しみをするよりも、觀念して一同入水することである。八左衞門が佛壇の彌陀の掛軸を卷いて懷中にすると、六兵衞が「いま一度、拜ませてくれ。」と賴んだ。平素、六兵衞は信心ぶかい男ではなかつたが、このときばかりは涙を流して彌陀の繪像に合掌した。岡使の太三郎もしみじみと拜んだ。

「くどいやうだが、どうせ死ぬほどなら。」と太三郎が、拜み終つてから云つた。「いま一度、淦汲みをしたらどんなものだらう。今度は、やつぱり南無阿彌陀佛で淦を汲まう。」

「いや、拜みかたは、お鬮を伺つてから定めよう。」と片表の善右衞門が强く云つた。

しかし爭つてゐる場合ではない。みんな「南無阿彌陀佛……」を唱へながら汲んでゐると、またもや一枚の高波が襲つて來て、膝までの深さであつた淦を腰までの深さにした。それで今度は南無阿彌陀佛を止して「六根清淨……」を唱へながら汲んだ。手足を忙しく動かしながら唱へる

には、六根清淨の方が唱へ易くて息切れを防いでくれる。一同、六根清淨で夜明けまで働いた。

十八日からは波が靜まつたが、寒さが身にこたへるやうになつた。雪もちらちら降つて來る。いよいよ極北の海へ流されて行くと見え、みんな繰返して考へるやうに、とてものこと日本に歸り着く望みはない。糧米も殘り少いので、一日に米二合を十一人分の食糧と定め、それに昆布を刻みこんで粥にした。鹽鮪は潮水につけ、木でたたいて柔らかくして、雨水で煮て食べた。味つけは少量の鹽水と、在りあはせの鰹節である。

さて、米が次第に減つて行くにつれ、人の氣も次第に荒くなつた。ときどき狂亂の發作を起す善右衞門は特別だが、ほかの者たちも船頭の平四郎に喰つてかかるやうになつた。平四郎が慾得づくで二十何俵も米を賣つたので、この難儀な身の上を百倍も難儀なものにする。唐丹浦を出帆のときも船宿の主人が、日が惡いから船出は止せと云つて留めたのに、宿賃が嵩ばるから船頭は自分の一存で船を出した。富山の藥賣に、われわれ船方どもは一ぱい喰はされた。さう云つて船方どもが平四郎を恨むので平四郎も持てあまし、この上はみんな心任せにするやうに、一人につき米三合あて分配した。飲水も殆どなくなつたので、海水を釜で煮てみたが、とても鹽辛くて飲めたものでない。海水を煮ると、その泡が甘くなるといふ話だが一向に甘くなかつたばかりでなく舌が曲るほどに鹽辛い。それで殘りの飲水は、誰も一定以上を飲んではいけないことにした。もはや毎日のやうに風がつづいたが、人氣は荒くなつて行く一方であつた。

翌、天保十年正月の初めから、次第に溫くなつて來た。越後で云へば春さきの陽氣である。こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com